

東北地方の塔婆類と野々江本江寺遺跡出土塔婆

山口 博之（山形県立博物館）

東北地方日本海側（青森県・秋田県・山形県）を中心として、当該時期の塔婆資料を瞥見し、さらに野々江本江寺遺跡出土資料についていくつかを指摘したい。東北地方全体の面積は約66,886km²であり、この地域は日本国約18%を占めている。なお、北海道を含めてその面積を算出すれば約150,338km²となり、国土の約40%にあたる。広大な地域ではあるが出土資料として野々江本江寺遺跡出土資料の類例は得られていない。

まず東北地方全体の様相について触れ、さらに文献資料にも範囲をひろげて野々江本江寺遺跡出土資料についていくつかを指摘したい。

I 東北地方の木製塔婆（10～14世紀代）について

この時代の野々江本江寺遺跡出土例に類する木製塔婆については、東北地方ではほとんど事例を知ることはできない。

青森県の青森市の石江遺跡群では古代末にかかる相輪型の木製品が出土している。これは非常に特殊なものであり類例を探すことができない。後考を期したい。岩手県の平泉遺跡群のうちの志羅山遺跡では、笠塔婆が12世紀代の池跡から出土している。この笠塔婆について高橋実央が詳述している（（財）岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター2000）。高橋によれば笠塔婆に記される文言から推定される宗教行為として「十斎日」や「現世利益的密教」の信仰などが伺えるという。笠塔婆の使用について出土資料から考察した論考は少なく貴重である。しかしながらいずれの笠塔婆も30cm内外の長さであり、珠洲市野々江本江寺遺跡のような長大なものではない。

この地域には吾妻鏡文治五年九月十七日条に福島県の白河関から青森県の外浜まで一町毎に金色の阿弥陀如来を描いた笠卒塔婆を配したという記録がある。また国宝の中尊寺経の「金光明王経金字宝塔曼荼羅」第三幀には朱彩の笠塔婆が描かれている。こうしたものは実在した可能性があるが少なくとも現在まで考古学資料として知見に上ってはいない。

秋田県北遺跡・州崎遺跡でも鎌倉期前後の墨書資料が出土しているが、これまた野々江本江寺の事例のような法量と形態は持たない。山形県大楯遺跡でも鎌倉時代の笠塔婆が出土しているが小型である。

注目されるのは山形県後田遺跡である。資料は遺跡の中央を南北に横断する川跡から出土したものである。出土状態は川岸ちかくにまとまっており、なんらかの儀礼によって廃棄されたことをうかがわせる。笠塔婆は全形を保っているものを参考とすれば、だいたいのものが30～40cm程度である。笠塔婆の先頭部を五輪塔型に切り込んだものもあるが、ほとんどのものは頭部が山形に作られ直下に二条の端刻みを持っている。記される文言はパンの種子を1字だけ配し、続けて南無大日如来と続くのが多い。一部普賢菩薩を記すものもある。組み合わせは大きく分けて笠塔婆+呪符木簡となる。呪符木簡は古代には頻繁に出現するがこの時期以降はほとんどみることができなくなる。

後田遺跡の年代であるが確実な紀年銘に恵まれないのだが、笠塔婆の一部に「安仁年二月九日」と記されている資料がある。この文言をどう読むかについては議論の分かれどころであり明確な結論は出されていない。私案ではあるが「安仁年二月九日」は、「安貞二年二月九日」を略したものと見ておきたい。この資料自体笠塔婆としては大型であり、鎌倉時代までさかのぼる古い様相を持っていること。また日本の年号で安を配するものは鎌倉時代では安貞のみであること。二月九日はおそらく時正であり彼岸をあらわし、時正は鎌倉時代から板碑など石造物に記されることが多くなること。さらに紀年には慶長五年を慶五と年号2文字目を略す場合などがあること。などによる。こうした推定

により木簡の紀年を安貞二年と見れば1228年ということになる。これ以前の安元二年（1176）も考察の対象ではあったが、12世紀代の遺物はまったく見ることができなかつたため除外している。

以上のようなことをまとめれば、古代的な木簡の様相はおそらく11世紀ごろに大きく変わり、12世紀になるとより後の時代に連なるような笠塔婆などの出現を見る。また、呪符木簡もこの時期を境として徐々に消滅していくとみることができよう。

しかしながら、野々江本江寺遺跡のような巨大な木製塔婆はこの地域ではみることはできないのである。つぎに石造物の様相について触れてみよう。

Ⅱ 石塔の出現と展開の諸相について

この地域の石塔の出現は12世紀代にさかのぼる。紀年のあるものとないものがあるが、紀年のあるものは、天養元年（1144年）山形県山形市立石寺「如法経所碑」などが上げられる。この石造物は凝灰岩製品であり全体として駒型に整形した石材の碑表に長文の文言を刻むものである。如法経を納める趣旨をその内容とし、経塚の造営記念碑としての意味があろう。なお、こうした如法経碑は全国でこの時期（11～13世紀中心）に営まれ、立石寺の事例はその北端をなしている。

またこの時期12世紀にさかんに石塔が造営されるのは、奥州藤原氏の根拠である岩手県平泉である。ここには、五輪塔（中尊寺釈尊院五輪塔が我国における在銘最古の五輪塔で、反花座の側面に平安時代後期仁安四年（1169）の紀年銘がある。）、平泉型宝塔（平泉に特徴的な宝塔であり、分布の中心が平泉を中心とした奥州藤原氏の勢力範囲と重なる。）や伝教大師坐像、阿弥陀如来などの大型石仏、さらには磨崖仏がある。しかしながら平泉以外の地域ではこうした石造物の造営は例外的である。

13世紀代の半ば以降になると板碑を中心とした石造物が営まれるようになる。これは野々江本江寺の木製塔婆の存在と関係して興味深いものがある。板碑は、青森県大光寺遺跡出土木製品を例として考えれば、素材を超えて相互に型式を交換する場合があると考えられはしまいか。青森県大光寺遺跡出土木製品は、報告書によれば長さ約157cm、幅約35cm、最大厚約9.5cm、最低厚約2cmである。頭部と思われる部分は逆台形状の突起があり、その下が半月状に盛り上がり、2条の刻線が施される。その盛り上がりから下は平坦に削られている。その下は腐朽しているもののやや厚みをもたせており、この部分を地面に差し込み板碑状に起立するのであろうという。種子などの痕跡はない。このような板碑状木製品の類例は、北海道上ノ国町の勝山館でも見受けることができる。

実はこうした形と類する石造物が山形県天童市を中心とする地域にあり、成生莊型板碑（通常山形となる先端部が三角形に屹立せずお椀状に盛り上がる型式の板碑）と呼ばれている。成生莊型板碑や大光寺遺跡出土木製品のような頭部形態の遠隔の地域での類似は、共通の祖形といったものがあることにより生じるのではなかろうか。

石造物の板碑と大光寺出土木製品などはきわめて類似することは、共通する概念を表現する際に素材が異なるだけであったとみることができるのかもしれない。つまり木製品と石造物は型式を相互に交換しうる存在であったと見ることができるのかもしれない。山形県天童市周辺の成生莊型と青森県の大光寺遺跡出土木製品や山梨県の板碑などとの類似性はこうした理由によるものと考えておきたい。さらに野々江本江寺遺跡出土の笠塔婆と板碑の類似性もこうした理由によるものかもしれない。

Ⅲ 野々江本江寺遺跡の木製塔婆について

野々江本江寺遺跡の木製板碑、木製笠塔婆に類する資料は少なくとも東北地方では知ることができない。このため東北の事例から論及できる点は少ないのだが、資料検討会で実見した内容を含めいくつか指摘しておきたい。

野々江本江寺遺跡木製笠塔婆額の実見により、種子を刻む部分の一部に朱彩の遺存がある可能性を

指摘したい。実は朱彩の笠塔婆には類例が存在するのである。まず東北地方の岩手県平泉町にある国宝中尊寺経の「金光明王経金字宝塔曼荼羅図」第三幀に描かれる朱彩の笠塔婆像と共に通する。この曼荼羅図は『金光明王経』経典の文字を以って宝塔一字を表したものであり、宝塔の左右に経典の趣意を絵像で表している。ここに朱彩の笠塔婆とこれを斧で切り倒そうとする人物が描かれている。12世紀に遡る事例となる。さらに吾妻鏡文治五年五月八日条には「…塔婆。被塗朱丹也。…」と記されており、塔婆は朱色に塗る場合のあることがわかる。同じように『餓鬼草紙』の塔婆は「河本家本」(東京国立博物館蔵)にある有名な石積み塚の上にある弥陀三尊を描いた笠塔婆には朱彩があり、おなじく「曹源寺本」(京都国立博物館蔵)の塔婆にも朱彩がある。餓鬼草紙の成立年代は12世紀代である。12世紀から13世紀の塔婆は朱彩されることがあるということを指摘しておきたい。

さてもう一点であるが、東北地方の事例からは水辺に關係して笠塔婆などが出土する場合のあることを報告した。さて、野々江本江寺遺跡の木製塔婆が出土した位置であるが、金川の河辺に位置している。想像をたくましくすれば金川河畔に木製塔婆が立ち並ぶ風景を思い浮かべることができる。実は木製塔婆は河畔に立ち並ぶことがあったのである。奥書に正安元年(1299)の紀年を持つ『一遍上人絵伝』には、木製塔婆がさまざまな場所に描かれており、当時木製塔婆がいかなる場所に営まれていたのかを示している。この中の『上野の踊屋』の場面には一遍によって造られた簡素な踊り屋が描かれているが、その周辺の風景として、川とそこに架け渡される板橋、さらに街道が描かれ、街道が川を渡河したあたりには木製塔婆が林立しているのである。こうしたあり方はおそらく水辺の祭祀として笠塔婆などが使用されたことと関連している可能性があるのかもしれない。中世には河畔に木製塔婆が営まれる場合のあったことを指摘しておきたい。

最後にではあるが、野々江本江寺の塔婆が3本出土していることからすれば三尊形式になるのではないかということや、額に記された種子は何かなどということについては引き続き興味をもっていきたいと思っている。

参考文献

- ① 男鹿市教育委員会2005「脇本城跡」男鹿市文化財調査報告書第29集
- ② 宮城県教育委員会2006「中野高柳遺跡IV」宮城県文化財調査報告書204集
- ③ 佐川美術館2004「国宝中尊寺展」
- ④ 岩手県埋蔵文化財センター他1995「発掘された北の都」
- ⑤ 元興寺仏教民俗資料研究所1976「明王院の碑伝」
- ⑥ 秋田県教育委員会2001「北遺跡」秋田県文化財調査報告書第315集
- ⑦ (財) 岩手県文化振興財団埋蔵文化財センター2000「志羅山遺跡第46・66・74発掘調査報告書」岩手県文化振興事業団埋蔵文化財発掘調査報告書第312集
- ⑧ 浪岡町2004「浪岡町史第二巻」
- ⑨ 大石直正・川崎利夫2001「中世奥羽と板碑の世界」
- ⑩ 秋田県教育委員会2000「州崎遺跡」秋田県文化財調査報告書第303集
- ⑪ 山形県埋蔵文化財センター1997「後田遺跡・大道下遺跡第2次発掘調査報告書」山形県埋蔵文化財センター調査報告書第49集